

## 第1フェーズ 受け止め方の学習支援

第3章では、「愛情の器」モデルに基づく愛着修復プログラム（ARPRAM）による支援について、事例を紹介しながら解説していきます。「愛情の器」モデルに基づく愛着修復プログラムについては、第1章⑤をご参照ください。次ページに、プログラムの概要の表2を再掲載します。まずは「第1フェーズ」の「受け止め方の学習支援」についてです。

### ★キーパーソンを決定し、そこにつなぐ支援

【事例23】 小学校二年生の女子Wさんは、床に寝転がったり、這ったりする。ときどき、学校の人にだけでなく訪問者などにも誰彼なく「こんにちは」とあいさつして回る等の立ち歩きがある。父母ともに厳しく、手が出ているらしい。Wさんは、家でほめられた

表2 「愛情の器」モデルに基づく愛着修復プログラム（ARPRAM）の概要

<p><b>第1フェーズ</b> 受け止め方の学 習支援</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キーパーソン決定と役割分担による、わかりやすい支援体制構築（1対1の関係づくり→キーパーソンにつなぐ・情報集約）</li> <li>・感情ラベリング支援＝感情学習（気持ちに名前をつけ、言い当てる）</li> <li>・「具体的行動」「結果認知」「感情認知」「愛着対象」の連合学習（「キーパーソンとともに」の意識化）</li> </ul>
<p><b>第2フェーズ</b> こども主体で大人主導の働きかけへの応答学習</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主導権をキーパーソンが握る＝「先手支援→個別の作業支援」←情報集約（求めに応じるだけの後手対応では効果がない）</li> <li>・役割付与と支援＝わかりやすい関係性＝関係意識化・行動の枠組み・報酬効果</li> </ul>
<p><b>第3フェーズ</b> 他者との関係づくり</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・橋渡し支援：キーパーソンを軸に他者とつなぐ支援（相手の意図を通訳しこう伝えるよう認知・行動のモデル提示）</li> <li>・見守り支援：寄り添う移動基地（フォロー：修正と確認）</li> <li>・探索基地化：固定基地（確認後の行動始発と報告・評価）</li> </ul>
<p><b>第4フェーズ</b> 自立に向けて・次年度に向けて</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・参照ポイントづくり：参照視を参照ポイントに転換し、行動のポイントとして意識化</li> <li>・受け渡しの儀式：新・旧キーパーソンと本人の3者立ち会いで実施（参照ポイントノート・参照視伝達）</li> </ul>

経験が少ない。裸足で上靴を履いていて、上靴も脱いでいることがある。

この事例では、安心基地欠如の問題が、ムラのある多動、床への接触や人への無警戒な接触行動に表れています。こうした場合、あいさつされた人や気がついた先生がそれぞれ判断で勝手にかかると、先ほどの第2章⑥でお話しした「愛情の摘まみ食い状態」が起きます。Wさんにとって、は学校で誰が「特定の人」か、自分の愛着対象、安全・安心基地かがわからないので、さまよっています。必要なのは、

誰かをキーパーソンに設定し、どのかわりもキーパーソンにつないでいく体制づくりが必要で  
す。

Wさんの場合は、担任のX先生をキーパーソンとします。教室内でWさんが誰に声をかけても  
担任のX先生につなぐよう、周りのこどもたちには、「Wさんが声をかけたときは、X先生に言っ  
てね」と伝えます。

他の先生が声をかけられたときは、「それは、担任のX先生に言おうね」と、WさんをX先生の  
ところまで連れていってもらいます。他の先生が「それは私じゃないよ」とWさんを受け入れな  
いと拒絶感を生み、Wさんの誰彼なしにかかわる気持ちを増幅させたり、ネガティブな感情がた  
まると不適切な行動に走ってしまう可能性を強めてしまいます。あるいは「それは、担任のX先  
生に言っただけ」と言うだけでは、Wさんが自分でX先生のところまで行けるとは限らず、やはり  
同様の結果になる可能性が高くなります。しっかりとキーパーソンのところまで連れていく、これ  
が大切です。

そして、本人から聞いたことをキーパーソンに確実に伝えます。「X先生、Wさん、〃をやりた  
いと言ってますよ」と。単に「お願いします」というアバウトなつなぎだけでは不十分です。キ  
ーパーソンに自分の思いがしっかりとつなぐたことを確認できる状態を、こどもに見せないと  
いけないのです。

つなごうとしたキーパーソンが出張などで不在、あるいは手が離せない状態のときはどうすれ  
ばいいでしょうか。キーパーソンが授業中でも、「その授業を中断してもつないでいい」というこ

とを、校内で共通理解しておいたほうがいいです。ただし、この授業中断は、第2フェーズの事例で述べますが、こどもの要求ではしてはいけません。こどもの主導権を強化してしまいます。「先生がつかないときだけキーパーソンにつながる」ということを徹底することも大切なポイントです。

その場でつなげないときは、声をかけられた先生が対応します。「担任のX先生がいらないから、今、先生がくをやってあげるね」と確認しながら。そして、大切なのは、対応しっぱなしにしないことです。後でしっかりと、キーパーソンにつながないといけません。Wさんのように小学校低学年くらいまでの場合は、こどもを伴ってキーパーソンのところに行き、「この子がくしたいと言ったので、くしました」ときちんと報告します。

その際に大切なのは、こどもがそれをして感じたであろうことをキーパーソンに伝えることです。「くをやって、Wさんはうれしそうだったので、X先生に伝えにきました。ね、うれしかったこと、X先生に伝えようね」と。このようにつないでもらう経験が、こどもが自分でしたことを報告してポジティブな感情を増やす探索基地のモデル行動になるのです。

ただ、こどもが小学校の高学年以上になると、伴われることを嫌がることもありますから、無理はしないでください。その場合は、教師間でのみ、報告をします。

特に、「叱る」という対応をした場合は、すぐにキーパーソンにつなぐ必要があります。ネガティブな感情がきつとこどもに生じていますから、そのネガティブな感情を自分で紛らわしてしまう機会を与えてしまうことは、決してよいことではないからです。

ここがポイント、理解と支援

キーパーソンを設定し、どのかわりも情報も、キーパーソンにつないでいくというところを共通理解することからスタートする。他の先生が本人から声をかけられたときは、「それは、○○先生（キーパーソン）に言おうね」と、こどもをキーパーソンのところまで連れていき、本人から聞いたことや、何をやって、どんな気持ちになったかをキーパーソンに確実に伝える。本人が、自分の思いがキーパーソンにつながったと確認できることが大切。

★キーパーソンを軸にした連携体制づくり

【事例24】 小学校一年生の男子Y君。攻撃行動が頻繁にあるが、自己防衛的で、やったことを認めず、自分が悪かったと認めない。支援員として支援に入っているが、時間が限られており、キーパーソンとしてどのようにかかわったらいいか。

キーパーソンが、いつも一緒にいる可能性が高い担任の先生ではない場合の、連携体制のつくり方を確認しましょう。

まず、こどもの登校時、あるいは授業が始まる直前や、キーパーソンである支援員の出勤時に、

こどもと一対一になれる場所（リソースルーム等）で、今日の「ミッション」を確認します（そこを拠点として、授業後、帰校時にもその拠点に立ち寄り、支援員に報告するようにさせます）。キーパーソンの支援員がそこに行けないときは、「ノート等に一言書く」「来たよシールを貼る」等の対応が必要です。

授業中もキーパーソンの支援員が付き添う場合は、その拠点からこどもは支援員と一緒にクラスに入ります。授業中は別の支援員や補助指導教員が担当する場合は、支援員とノート等で約束したミッションを確認後、こどもは一人でクラスに入ります。いずれの場合でも、その時間のミッションについては、担任またはその時間の担当支援員、補助指導教員と必ず確認しておき、それができていたら、担任または他の支援員が必ずほめるようにします。

キーパーソンの支援員が授業中にはいない場合は、授業が終わったら、担任は必ず、その時間のこどもの様子をキーパーソンの支援員に伝えます。同時に、こども本人からもキーパーソンの支援員は必ず報告を受け、ほめ、認めます。

また、キーパーソン以外の大人の不適切なかわりを避けることが重要です。例えば、こどもがミッションと関係ない不適切な行動をしたときにいちいち叱ったりすると、ミッションの大切さの認識を混乱させ、それができていることの自己評価を不適切に下げてしまいます。注意をする必要がある場合は、「○○するんだったよね」と、すべきこと、つまりミッションの確認をする注意の仕方を心がけます。また、ミッションと関係のない、よい行動をしたことをほめるのも、同様にしないほうがいいでしょう。何がすべきことなのかの認識が拡散してしまいます。

授業にキーパーソンの支援員が付き添う場合は、ペア学習、教え合い・学び合い、個別学習支援、環境構造化支援、役割付与支援を実施する際のコーディネイト役を心がけます。例えば、教え合い・学び合いでは、他のこともとのかかわり方を支援員が教えます。「こんなふうに聞いてごらん」「こんなふうに答えてごらん」などと。また、役割付与支援では、第2フェーズの支援ですが、こどもが授業内の具体的な役割をするための補助をします。その際、キーパーソンである支援員を軸に、他の情報、他者との橋渡し支援（これは第3フェーズの支援です。例えば、役割の範囲を示したり、バッティングを防ぐ支援、交替の支援等）が必要です。

授業中のその他の支援においても、キーパーソンは、このように連携体制をつくるためのコーディネイト機能を発揮しなければなりません。周りの先生たちもそのコーディネイト機能の邪魔をせず、盛り立てる体制をつくれるかどうかが大変な鍵となるのです。そのためには、管理職がその体制をつくるためにリーダーシップを発揮することが必要となります。

### 「ここがポイント」、理解と支援

担任でなくてもキーパーソンになることは可能。キーパーソンを軸にした連携体制をつくるためには、管理職をはじめ周りの先生たちが、キーパーソンのコーディネイト機能を盛り立てるように協力していく。